

里見八犬傳

第九輯

卷貳



~13  
3416  
40



曲亭翁手集  
續出

# 八犬傳第九輯

柳川重信子  
繪畫

淮南殘丹  
鷄犬升天

文溪堂精刊



八犬傳第九輯自叙

在昔自室町氏走鹿諸侯割据不稟武斷  
 於幕下大以駢吞小強以威服弱是以蝸  
 角力戰無所不勉狼貪蠶食各不知厭當  
 是之時田夫植矛而耕耘山婦掛弓而紡  
 織人情都賢勇悍不厚於忠孝好名忘死  
 屠城斫骨以為愉快且也每莅軍陳為勇

八犬傳九輯卷一

文溪堂藏

名以知于敵改姓異名欲不與衆同者聞  
有之所謂若鷓北六花氏吉見八谷黨里  
見八犬士壬子七馬九牛十勇女大内十  
杉黨上秋十五山黨朝倉十八村黨及山  
中狼之々野中牛助不遑救舉也其名取  
載軍記事實多不詳素是史闕文歟以類  
想像此則暴虎憑河之勇已矣蓋戰國澆

漓士風武勇有餘而文學不足徒倡異好  
奇為俗如此嗚呼野哉野哉文武猶花實  
也未見其花惡得其實耶故孔子曰有文  
備者必有武備若夫其勇有餘而一文不  
通則其行侏離譬如沐猴之戴冕與彼楚  
人兇暴又何異焉由此思之三綱無道  
離世行似獍梟者雖有記傳實錄而不足

見矣。是吾所以作八代傳也。然而今之所傳非古之八代士事也。非古之八代士事猶且曰里見八代士其故何也。野史用心假彼名而新其事於是乎善可以勸惡亦足懲果乎君子尋文外隱微而解悟獎導深意婦幼代一日觀場而不覺春日秋夜之長云因茲刊行書賈利市三倍不思作

者之閑與不閑一年徵月責所彫鏤五十有餘卷于此既而至第九輯意匠漸疲腹稿有限結局團圓且近抑童蒙等身之書於稗史所罕閱者儻指可復俟輯末之出焉天保五年長月之吉題于著作堂東園菊花深處

蓑笠漁隱



董齋盛義書



南總里見八犬傳第九輯上套總目錄

二犬復讐始自本輯第一卷

孤忠携鑣訟衆惡

第九十二回

坐轎守如救主 隔川孝嗣演志

第九十三回

高暇板橋道節放戰馬 五十子城信乃留姓名

第九十四回

復讐言之三在第二卷 復讐言之四尚在本卷

第九十五回

梟頭鎧忠與凱旋 鼓盆悼定正知過

第九十六回

復讐言之五又在第三卷 復讐言之二在本卷

第九十七回

良將不征而地廣二總 兇賊無心而自訴積惡

第九十八回

盜從者偷走被盜戮 宿賊巢強人免賊難

第九十九回

素藤發迹之二在本卷 遠親惑邪說鬧館山城

第一百回

素藤發迹之三尚在本卷 返覓異術美人彌奇

第一百一回

老尼薦計舊祠新茸 逆將樹人公子喪衛

第一百二回

伏姬顯靈補破敗 義成分兵征逆賊

第一百三回

里見源老侯富山吊亡女 大江親兵衛高峰拉勅寇

第九輯上套六卷總目錄終下套六卷共十二卷陸續刊行



基田權頭  
素藤

八百比丘尼  
妙椿

去々波のよるへ乃  
 破ふかひのあれと  
 みるゑあやあは  
 あまねれこぢひ  
 雷水



神童甫九歳  
 筋力捷成人  
 不羨甘羅敏  
 勇且唯得仁  
 著作堂

大江親兵衛  
仁

平田張金作  
与冬

砥時願八業堂  
三



花ののぬ  
 みまかしの  
 姫あやれ  
 とたまの  
 世あわれ  
 危 玄同

伏姫神灵  
 公世のめ

東六郎辰相  
 とうの辰相

八十八番

八十八番



創業尚義 守文弥賢  
 富有房總 九世延延  
 頼鳥齋散仙

里見義成朝臣  
 さとみぎよなる

杉倉武者助  
 すぎくらむげすけ

八十八番

八十八番

佐渡相川人石井夏海氏者予故人也。山海隔絕不相見。二十有餘年于此。客歲偶有鴻翅其書曰。貴著八犬傳一書新奇絕妙。世人所知。我孤嶋亦年年流布。雖老圃艸公樵夫鑛匠而未閱為羞。如僕秉燭不知飽愛玩與米石一般。因而為庶幾附驥之僥幸。呈閱賤咏二三。反歌三伏乞賜筆削見許。載諸後輯。則生平望足矣。於戲舊故情願不可辭。然若其長歌無餘楮可錄。即取二三短歌以附載焉。歌曰。家々々の看子や。このをくれ人夜をのほのまけ門のぬかそ。

いぬのぬかの犬のとねひひ糸なむむ筆ゆりて綾子はる君かき

あつひちををるゝあとのまゐる不又きく宛めてたしとほり毛統渡人

右夏海氏所咏其第二歌則取今昔物語載白犬吞繭而鼻中吐絲故事云。與本傳第七輯目錄欄內所圖蓋繭紙糊狗即同意。蓑笠陳人又識

南總里見八犬傳第九輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第九十二回 二犬路と分ちて一犬と資く

孤忠鑣小携りて衆悪を訟ふ

文明十五年癸卯の春正月二十一日の黎明小大阪毛野胤智ハ多年の宿望時至りて父胤の度の難言りけ。籠山逸東太縁連が主君扇谷定正小説薦めて那小田原北條家密議の使と奉りそ。副使と傳え。龜門鍋介既済越杉駱三一峯鯉崎悪四郎猛虎們のあらし大石憲実の家臣に仁田山晋五共侶小伴當許又從て五十子の城内より今朝首途の行列正小朝日の昇る時候武藏州品草と大木村の回る。鈴茂林をまよける。渡打際を尋着て路傍の樹陰より立頭れ々名告かけて携りける鳥此甬鏡りて先小杖と縁連が馬の曾頭打斃して走菟り。笠電山の若堂四名と殺伏する。隙縁連短鎗を引提進退場と揃りて路方



なる毛野が敵多き止るりもまた縁連を腕乱れて浅夷四五不處負多し茲と先途と戦  
 ふるの儘の程縁連が後方馬と歩きたる電門既濟野崎猛虎這那兩個の副使の  
 縁連と相距るる二町許りければ初よりして那隊不遇を縁連が伴當の慌あも逃走の  
 來て絆悠々と報へ既濟猛虎うち駭けて現剛才小鳥銃の响は迫りてやあるるが  
 思ひ小原来檻杓見せざるれ兵毎續けと喚りて馬拍れ前後存一暮地馳着てとれは  
 縁連が若黨四名へ身首處を異ふと馬共侶小して登時後れて従ひ來る。這副使の  
 伴當の後の跟り立たつた縁連が奴僕們的迫り田の畔を指さして二位老爺那箇大隈  
 野と名出りたる狼藉見へ那里不在と報るるうち听猛虎既濟勒を和え倍とるる原  
 來件の檻杓見へ尚立去ら程近り縁連數も兵毎と両聲劇く罵聲て馬を找  
 め縁連と相資多く欲せられ去向へ陝水田の畔で一騎打る進退不便の安危と茲の  
 料り難て左右もうち找るる然とて甲と踏渡るるも鋤も甘薄水不底見られぬ泥

深ければ人馬の脚へ立く誰何と死と躊躇とそれ無斬と縁連の也下鎗もささふ  
 屢も野不敵と惱されて既の危光景を大家氣と向むる中も猛虎怒り堪えりけん  
 意を聲もあつて電門主も左右の路近りぬもいと廣り勢と遣不和殿の越  
 杉仁田山と謀り合きて左右の路も多勢と俱しくうち寄せや咱們的獨中路も那裏の危窮成  
 極べし先々といひも馬と閃りと兼放りて槍奴も持しる鎗と槍合り袂とそ幅三尺足  
 らしける水田の畔と筋前の似く足信しく走りゆく後方不從若黨奴隸皆後れと極の美の二  
 粒並に細路と喘むる不續けけ介程小三隊も越杉駱三仁田山晋五も絆の異変とぞ知て馬を  
 飛して來なければ既濟も亦馬を寄せ那方より癖者と捕捕るる隊配も夜も急迫り火連の  
 進退駱三晋五異議もなき也隊兵もあつて引られ左右の畔路西の方より電門既濟  
 東の方へ越杉仁田山隊兵各三二十名先も找りしは筋前も起ッ鳥と共に駭く白路馬も  
 未食難々朝西の風も着せしと翔りける這方より寄る大敵も大阪萬夫の勇ありとも脱れぬ

ぶと思ふを勢いよりの機を既済一峯普五の勢を東西より咄と嘯て直走の  
 由くといふ幾るに西も東も去向の畔は楯耳の影の陰より思ひけるも見りと一度の突出  
 毛鎗の既済一峯が馬の太腹馬熟と串れて這那共必死の一聲嘶たれども倒れども禁むらむら  
 地の推倒して頭れも兩個の勇士三條路の一對の蒲葎威の身甲は細鱗の臂縛筋鐵打る肝  
 衣を奇物造の両刀の瑞昂を跨へるも大及の鎧を引提て去向の畔と立塞が面魂を無敵の  
 胆勇西と東を聲高と合して噫物々死奸黨が勢を助劍三味何処とく路をえは侍る  
 べと豫より思ふよして這西も稟塚陰の埋伏して大坂毛野が復讐言の外から成る異姓の弟兄大  
 甲小文吾悌順と喚做を猛者を知らず汝汝電門鍋介を陣外奔の袖號の字われは猜し  
 身を起して刃を受よと名告り馬を東に立す一個の勇士も劣る鎧を横とて汝越杉致致  
 松次輾轉びを殺し要き後多武も馬を伐り大坂毛野が義兄弟大川莊介義任のあり逃

とも逃さず找んと欲するとも弥勒の世まで足とる死處の快く勝負を決せよと勢い怯ま  
 武勇の廣言侮りて必も身も傷れぬ東西存一稍立向既済一峯東馬と打たる仁  
 田山晋五も只一人の敵と思へ傲々不得若黨奴隷と罵励と短兵急小敷んと左右の畔を左  
 右の戦ひ五十子方の勢といへも尚義勁勇和漢の稀る這二大士の鎧頭小誰一個も當  
 るは東西俱不足と乱と持する前も射る迫る或は鎧を反飛され胸を刺れて伏すも或は  
 刀を打落されて水田滾入るも瞬間俯累りて死者者十名有餘の它も刀瘡見り  
 ければ西も東も辟易して逃る不快足足曳の山の本葉の散るど海邊を投て走るけり  
 程の西の頭人電門鍋介既済の小文吾と刃を交へて小雲英時挑まされぬも大士の敵も足る  
 のるる水田中へ突倒されて起も揚らぬ命を殞一隊兵毎敬驚怕れて皆一辟敗走ると小文  
 五のる不逃下も韓盧の狐狸を驅る似く自ら吻を趕さけり然り又東の頭人越杉駱三峯は  
 初莊介小馬を刺れて落る折れ臂と傷らて殆痛楚堪ざりしと辛まて身を起して仁田山晋五



八尺傳九郎卷二

文安堂



八尺傳九郎卷一

文安堂



兵侶不推捕網と鼓んとせし必ふも似ぞ突立れて更ふ深きと肩へ逃る躬方と推倒  
 され刺晋五の馬踏れて曾骨折け死にけり。その中仁田山晋五の始りて馬を走らせし  
 身後隊ま存りて。莊介が鎧を避く連の躬方と找めしが。群る羊の角をも。猛虎を  
 突んとす小似て向ふ命と煩。逃るも都て血塗れ。皆四零八散する。晋五の俱も度  
 失して素の鞭拍て逃走る。莊介の不遣り。と。勇る鼓耳のり。恥と知らず。鉞刀武士の  
 冒義小戸田河原を我假首と斬梟る。仁田山晋五のうら。の鎧辨小厩字の回りの知りぬ  
 那折小戸田河原を。戦殺する。十條力尺八。與不怨と雪め返せ。と罵辱も。飛が似る。趕鬼  
 且晋五の胆と冷し。馬駛らぬ。一所在心地と。連の鞭と鳴ら。命と限り。逃  
 たる。空下休題再説。是より先縁連の毛野が。大刀風の烈し。身只危く。覺折る。陝田中の  
 畔路より。鰐崎西郎猛虎。自餘の副使。先を。草烏地小接け。迫り喚る。鼓耳高き。音山  
 主。善山則。善山之縁連。改。心強。五子殿。正。の御内を。數戰功。名揚。萬夫無當と。喚

たる。鰐崎猛虎が。来る。を。仇。也。寛家と。身。の。程。知。ぬ。一個。の。檻。檢。見。虎。の。餌。は。る。大。阪。と。名。ら。し。  
 屠る。小。の。隙。入。る。突。然。と。暗。は。り。不。ぞ。自。負。廣。言。且。走。り。且。馬。り。て。勢。は。猛。く。迫。る。縁。連。は。れ。ち。り。と。は。り。て。  
 連。の。不。言。で。閃。め。る。鎧。は。透。回。の。を。れ。ぬ。毛。野。は。此。の。怯。る。色。を。既。不。迫。り。猛。虎。と。後。見。掛。り。縁。連。が。  
 踏。入。刺。し。鎧。の。尖。兒。と。閃。り。と。外。へ。丁。と。斬。る。刀。の。牙。縁。連。の。鎧。の。纏。兒。折。落。され。て。放。馬。は。急。に。腰。力。を。抜  
 ん。と。柄。の。も。と。横。る。那。時。速。く。這。時。速。く。毛。野。は。一。聲。フツと。激。音。を。破。り。斬。る。刀。の。電。光。縁。連。は。左。  
 肩。尖。研。られ。て。苦。と。叫。び。果。然。と。醫。坐。業。撞。と。倒。れ。け。り。程。の。も。も。猛。虎。の。朋。輩。の。仇。逃。さ。ず。敦。國。猛。く。丁。  
 と。突。く。鎧。と。發。失。と。受。流。と。十。合。あ。ま。り。を。戦。ふ。大。刀。助。至。勢。の。大。阪。を。殺。立。れ。と。術。と。盡。し。猛。虎。  
 焦。燥。で。閃。め。り。槍。尖。は。毛。野。の。身。に。反。せ。猛。虎。意。を。力。の。も。り。と。空。突。き。田。畔。の。様。の。伐。株。を。  
 刺。串。に。放。馬。慌。て。抜。き。せ。毛。野。の。透。さ。げ。衝。と。寄。せ。刀。を。抗。て。丁。と。鼓。を。然。し。も。卷。の。狂。ひ。も。猛。  
 虎。も。亦。眼。快。く。不。依。鎧。を。ち。棄。て。身。を。沈。し。大。阪。の。脚。を。巢。巢。と。跌。走。し。刀。を。再。埋。と。り。隊。を。  
 引。ち。と。兩。の。引。柄。を。眉。上。叩。く。撤。抗。し。現。這。鰐。崎。猛。虎。の。心。術。を。直。ら。ぬ。羊。來。數。度。は。戰。場。を。

一番も後れを合ふべからず。然らば、脊力に三十許人敵して、船を馳せ、泉の親衛鐵門を破り、義  
秀の伯仲を以て本事の違ふを器械合せて義経の少将を以て大阪毛野を以て三拂隊とて  
撥撫する為、肉を餓す。鷗の雛猿と捉る不異る。其の投殺さんと以てけん、撤さば、那這と、西二回  
持送りて矢聲を擡て投墜せし。毛野の宙を身と肉めりて、投れざる、托地と蹴る。修煉の白打、猛  
虎の右の腸骨撲折れて、躬所の痛癢、小霏時の堪む。云とをり、不仰反さる。身と轉して、仆れり。登  
時、毛野の衆、楯を以て頭と撥んと、猛虎の頭、鬚を左の、膝へる程、由も、大鷲崎の伴、當約、莫八  
九名、後走、跟いて來り。這光景、驚愕、謀て、大家主、敵せり。と、あめり、路、陝、け、推、並、て、找、れ、  
由、先、立、さ、る、一、個、の、若、黨、刀、を、見、り、と、板、持、て、走、蒐、り、せ、り。程、不、毛、野、の、性、ま、ま、左、の、中、に、猛、虎、を  
あ、不、厭、ま、て、放、さ、る。右、の、小、石、を、撥、撫、て、耶、と、聲、擡、て、托、地、と、擲、り、寬、以、錯、を、那、若、黨、の、眉、間、を、酷、擊、  
擡、り、て、叫、び、も、果、死、せ、り。大、家、と、れ、舌、を、掉、せ、找、と、難、さ、る。程、不、毛、野、の、透、る、臂、近、く、小、石、を、食、り、  
復、敵、を、投、擡、お、驚、駭、を、立、さ、る。目、の、若、黨、も、亦、咽、喉、を、敵、を、傷、ら、れ、鮮、血、を、吐、け、り。本、意、怕、る、伴

當門の、懐、を、濛、と、逃、亡、し、影、を、不、見、さ、る。毛、野、の、然、も、不、あ、る。を、冷、は、び、う、腰、を、探、り、短、刀、を、見、  
て、引、抜、け、及、復、さ、る。肩、胸、撥、く、猛、虎、を、鬚、と、又、引、柄、を、頭、撥、折、り、刀、を、拭、け、腰、不、帶、で、首、級、を、引、提、て、  
身、を、起、し、後、方、小、石、を、縁、連、の、折、り、を、我、不、復、り、と、驚、駭、を、立、さ、る。腰、刀、を、見、り、と、拔、け、立、あ、る。と、聲、  
と、も、け、き、背、後、より、兩、段、あ、る。と、と、敵、を、刀、の、光、り、小、身、を、反、し、毛、野、の、持、ち、猛、虎、の、頭、を、楚、と、受、任、  
れ、る。肩、も、敵、を、又、振、抗、る。刀、小、先、を、首、級、の、敵、眼、縁、連、の、赤、眼、を、打、れ、て、叫、苦、を、た、ら、す。小、石、を、食、り、  
も、あ、る。せ、に、拔、け、敵、を、毛、野、が、卷、火、鏡、短、刀、を、敵、に、て、び、叫、び、も、あ、る。敵、を、勸、ま、れる。縁、連、が、頭、顛、撲、地、  
と、滾、落、し、て、軀、も、共、不、見、け、り。の、時、猛、虎、が、伴、當、の、皆、を、さ、る。逃、亡、せ、り。更、不、近、く、敵、を、を、け、れ、毛、野、の、  
除、不、短、刀、の、鮮、血、を、拭、け、鞋、を、收、め、又、猛、虎、と、組、方、折、指、を、刀、を、合、抗、て、お、も、推、拭、け、骨、を、帶、で、飲、然、と、  
去、て、四、下、を、る。小、這、田、の、畔、大、石、を、榛、樹、の、伐、株、小、柄、枝、の、脩、く、ぬ、き、あ、り、是、先、竟、と、獨、言、先、懷、より、  
會、經、の、亡、父、の、法、號、を、寫、着、る。小、卷、幅、を、さ、る。戴、け、推、開、し、件、の、榛、の、柄、枝、を、掛、て、然、而、寬、家、縁、  
連、の、首、級、を、懸、て、引、提、さ、る。さ、る。水、田、の、氷、を、摧、し、て、塗、れ、鮮、血、を、洗、流、し、て、那、伐、株、を、ち、載、り、親、小、

たけね 向て念まるや。往る寛正六年冬十一月馬加常武が奸計で這縁連を殺されぬ。先考不滅の  
 霊あふ今這血食を御食多常武一家の爲比血の毒を復たせしむる。龍山縁連の名を復たす  
 埋めし。今に至りて十七年天運を登り循環して死を復たせしむる。願ふ義母 楳度 楳室 井小第  
 兄 栗飯原 益之助 皆共侶小影向して這血食を觀て生前の恨を養育と先大人と存一天堂を生  
 ぶ。弟玉枕 皆たり。此の法師を念と復讐の責任を訴る。孝  
 子の誠心決れる限る。哀歎交吐を涙と拂ひあむ。綾四維錦綉たるを忘れて姑且を合  
 當ものも釋さるけり。浩処不楚然と近く人の足响を毛野の急おんれは是則別人  
 二天士莊介小文吾之登時毛野の邊へ小巻幅を巻收めて身を起こり笑ひの寄る  
 邊へと所迎へておも思ひかけゆ。大田主大川主も俱々怪我のり。飲什磨いふと縁より  
 けの復讐を知れけん。御向の寛家の方人們が東西二條の畔路より縁連を援け來り折和  
 君們中途に埋伏して遮り留めて敷。果しるや殘黨を趕れる。その支の爲体も過目敷とされぬ。

某も亦縁連們と闘戦の最中よりけり。討つる。云云と支向ふ。追送るといふ。既和君們的補助  
 ともて三方より敵を受て寛家縁連が爲助劍を。鯉崎悪四郎猛虎と飲喚做を武士の槍法  
 力量はたの敵もあつた。とそを漏さ敷き果して終に縁連の首級を獲り。その折和の  
 伴當們の後走れ未だ。折和の亦某が投石を敷かれ駭怖れて一個も送る。逃さる。余後近  
 つ敵もあつた。寛家の首級と亡父の向を果し折和君們這里から來りて疑いと釋く  
 謝する所を知らぬ。かきも意外の再會が。然し喜び。うち思ひ。方一期の事は何支り亦あれ  
 優ま。感嘆の外に誠の珍重と。諄復し。然し演れ。小文吾之莊介合笑を。點頭で  
 如右思ひ。理り疑るも亦所以あり。既和殿を見られ。我々の那縁連も助劍せんと。競い  
 本。敵と東西不速留り。那五十子の副使より。雷門既濟越杉一峯と飲喚做を。這那  
 二名を敷捕りて。逃る。仁田山晋五們を透さ。連り不趕。蒐る。晋五の騎馬の伴當們も皆

逃走の快けれ。往方も知まらぬ。然れども兵法小窮寇の追ふるを敬言もある。遠く涉獵ら。趕垂れて和殿の安危を知らず。欲しきや。連立から来る折又七八個の敵。あひあひ。目今和殿の徳々と。報あひ。よよ。思ひ合ぬ。他們的縁連猛虎們が伴當で。和殿の投石不立足も。遠くも逃て来ぬ。人那折然。知らぬ。知らぬ。聞見奴們。らね。我門二名推並ひて。路を塞いで突立。を三四人を刺果たり。その餘も逃亡。於。軀て其首より引返して。急と。是れ故方僅から来る。和殿の與。那助劍。們を。般。拂。去。昨夜より。偷。多。隊配せし。我門二名の。大飼犬村。而勇士。隊兵。子名。を。後へ。便宜の処。伏て在り。ある萬一の與。れ。その義。及。び。る。故。和殿の對。對。約。莫。け。の。進。退。大。山。大。塚。の。謀。り。の。處。を。ち。多。多。猜。せし。獨。大。山。道。の。即。の。智。計。より。知。れ。も。這。里。の。四。方。より。見。且。され。長。談。不。早。な。卒。を。那。里。の。茂。林。蔭。に。退。れ。送。不。意。中。と。盡。ま。り。や。よ。と。く。と。り。を。せ。送。代。の。物。語。ら。い。木。ま。及。水。の。大。川。と。舌。り。と。畊。を。大。田。の。辨。論。言。皆。意。表。ふ。

鬼神不測の隊配り。毛野の半信半疑を。今犬村と飲せ。亦人の。も。向。き。ほ。く。思。へ。も。現。這。里。の。田。中。の。敵。の。推。寄。來。る。と。あ。ら。防。戰。の。與。便。宜。あ。ら。ぬ。の。よ。の。理。の。る。ま。に。敢。異。淺。せ。點。頭。く。原。來。和。君。們。の。と。多。多。自。餘。の。大。士。も。我。與。俱。力。を。勦。せ。ん。そ。隊。配。あり。い。の。奇。大。然。ら。那。首。退。れ。送。不。餘。談。と。盡。ま。り。と。心。を。ら。ち。連。立。て。鈴。の。茂。林。邊。に。赴。く。程。朝。日。を。影。刺。昇。り。辰。の。初。め。の。け。り。看。官。孰。思。ひ。か。あ。の。日。毛。野。莊。介。小。文。五。門。が。敵。と。三。處。の。挑。戰。は。皆。是。同。時。の。あ。ら。し。長。譚。緩。語。の。上。の。あ。ら。各。々。其。首。の。刃。と。交。へ。勝。者。の。捷。負。者。の。輸。奔。者。の。走。り。逐。者。の。趕。の。こ。都。々。小。雲。集。時。の。あ。れ。も。是。を。文。の。綴。る。と。死。の。形。容。の。語。勢。あり。三。方。四。方。と。一。緒。合。し。て。寫。し。給。べ。い。あ。わ。づ。れ。ば。あ。の。似。ぎ。長。く。あ。ら。し。と。の。あ。ら。ん。教。今。小。初。め。と。る。ら。只。瞬。息。の。と。數。萬。言。不。終。れる。則。是。文。字。不。在。り。又。數。百。年。の。長。々。し。を。數。行。の。筆。小。約。舒。る。亦。是。文。字。の。う。あ。ら。し。と。思。ひ。目。前。の。理。と。推。ま。者。の。古。語。云。琴。柱。不。膠。着。る。

一話除殺系。介程小仁田山晋五の大川莊介小繁一趕れ。既小危かりけるを。  
 幸ひなく乗る馬の脚強ければ逃延。間迫るる一快五十子へ走りかへてより。  
 注進まげれと尋思。あつる不走る馬。馬小方ら。一個の伴當喘々後。主僕谷山の頭。  
 ちを來りける程。一葉取敏。死樹間より。誰か知れ。我々の前。晋五の左の肩と射られて馬より。  
 控と落。一伴當吐嗟と。あつる駭慌て逃んと。四下をみる程。もあつる。又突然と。  
 其々の前。足と射られて。仆れり。登時。伴の樹蔭より。雑兵四五名走り。仁田山主。  
 僕と起。も立。と。あつる。と。索と。横て。宙の吊。を。わ。中。一。個。の。雑。兵。晋。五。が。  
 馬の駭。走。る。と。昔。奪。地。不。趕。近。着。て。鈎。索。閃。り。と。投。擲。て。馬。足。不。勝。支。牽。駐。め。人。馬。ひ。と。  
 多。生。拘。の。開。場。佳。妙。と。悄。語。て。一。葉。時。も。あ。つ。る。皆。共。侶。不。故。の。樹。蔭。へ。退。れ。り。話。  
 介。兩。頭。是。より。先。五。十。子。の。城。内。中。縁。連。井。不。既。濟。一。峯。猛。虎。們。が。伴。當。の。逃。走。快。り。の。  
 幾。名。漸。々。か。つ。る。中。途。の。異。変。と。訴。る。有。司。們。敬。馬。を。さ。ら。ち。所。ふ。御。高。鈴。の。茂。林。の。頭。

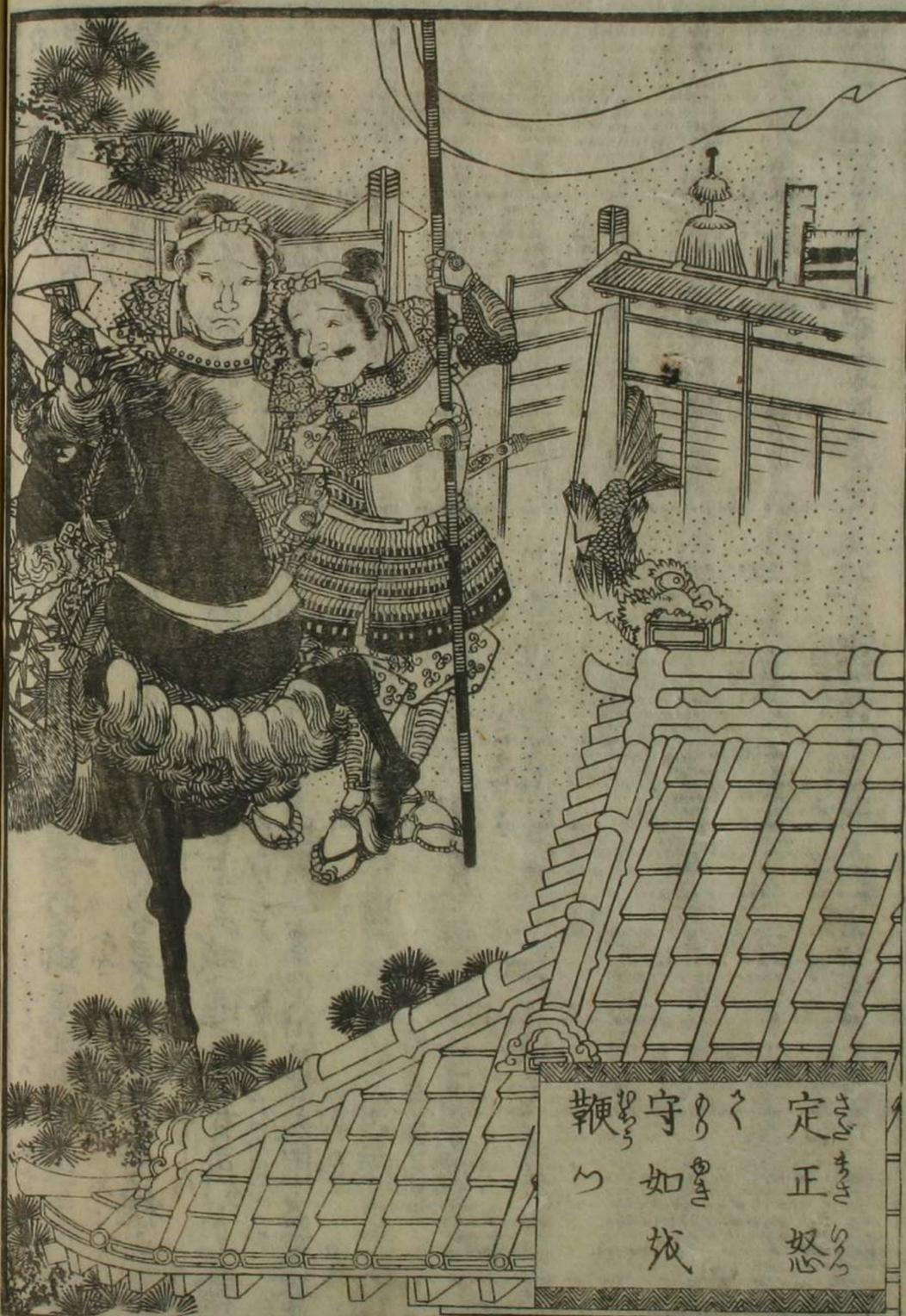
大坂毛野胤智と夜喚。一個の樞松見埋伏。一樹蔭に在る正使。龜山免太。  
 夫の昔名を喚び。谷仇多。免下を。推。つ。る。鳥。背。銃。の。龜。山。生。六。乗。る。馬。鼓。を。  
 反。及。落。さ。せ。て。刀。を。抜。て。走。り。寄。る。折。龜。山。若。黨。三。四。名。推。隔。捕。縛。て。連。り。不。防。に。戦。ひ。と。那。大。  
 引。提。て。水。田。の。畔。に。退。れ。て。趕。る。毛。野。と。戦。ふ。程。小。道。後。方。に。緩。歩。せ。る。副。使。の。甲。し。は。知。り。て。俱。方。に。  
 勅。見。を。馬。と。飛。て。來。り。け。れ。も。路。狹。け。れ。ば。找。ひ。不。便。す。故。に。猛。可。隊。配。を。三。方。に。立。つ。れ。鶴。  
 崎。生。の。中。路。より。又。電。門。越。杉。仁。田。山。の。人。々。の。左。右。の。畔。より。馬。を。找。め。て。數。果。さ。ん。と。急。に。小。思。ひ。  
 かけ。左。右。の。畔。より。又。那。毛。野。が。助。劍。の。猛。者。二。名。あり。一。個。大。甲。小。文。吾。二。個。大。川。莊。介。と。名。告。  
 であ。れ。這。那。左。右。齊。一。起。り。と。鎧。の。越。杉。電。門。の。馬。と。刺。槍。一。立。塞。り。て。其。勢。が。不。撓。も。是。戦。ふ。ら。  
 敵。の。名。不。過。され。も。俱。方。に。煥。鍊。の。猛。者。一。騎。打。り。田。の。畔。で。且。三。方。に。別。れ。る。御。方。の。隊。  
 配。り。合。期。を。任。れ。捷。と。攬。んと。輒。か。ず。も。先。快。く。更。の。趣。と。報。を。ら。ん。と。思。ふ。り。不。走。り。





十九

〇〇〇



鞭むち守もりく定さきま  
 如ごとくき正まさき  
 城しろ怒いかりら

走死うしに美みのぬとの心こころの甲かぶつ探たづる間まもあらず隊たいの軍いくさ兵へいの勢いきほひ約やく二に百ひゃく名な畧りやく武ぶ具ぐの器き械けい合あひて威い廣くわう  
庭にわの羅ら列れつの當あた下した大だい將しやう定じやう正せいの純じゆん絳じやう錦きんの戦いくさ袍ぽうの紫むらさ絲しの好この葉は季き鏝えんの尚なほ可よ已よ時ときの透と透と向むか  
もあらず着き下したあらず龍りゆう頭とうの兜かぶとの緒いとを締しめ藤ふじ卷まと名なけり當あた家け重じゆう代だいの太たい刀とうの虎こ皮ひの尻しつ鞆たもと  
檣かざりの腰こし踏ふへ九く寸すん五ご分ぶんの刺さ鞋せの七しち首しゆと挿さ副ふて三尺さんせき五ご寸すんの小せう眉まゆ尖とが刀とうと脇わき挾くわ三さん精しやう好こう  
奴やつ袴はかまのあらげがささと音ねままと裾すそ短みづかの穿う做せす勢いきほひ以も猛もうく出でて多おほく縁えん頬ほ近ちかく牽ひ居ゐる馬うま  
閃ひらりとちち無なりてささらちちおんおんとせせれ程ほどの縁えん連れん們らが横よこ死しのまちち後あと堂どうへもも歩ありあらせぬ  
鮮せん虫ちゆう目めの之これ前まへの仰おほぶぶりり唐たう突とつを尋たづねねすすままとと河か鯉り權けん佐さ守しゆ如ごとく末すえふふけけるる定じやう正せいの太たい刀とう毛もう  
野の們らをみみつつるる征せい伐はつああららんとんとてささらちち陣ぢんの折をりりけけれればば守まもりり如ごとく吐つ嗟そととちち鞍あ馬ま以もて迹あとをを跟たぎぎ  
廣くわう庭ていへ走をりり下したすす定じやう正せいの馬うまの鑣せう面めんを推おししめ詞ことば意い迫せまりり諫いさめめるるああららず物もの体ていをを我われ君きみの物もの  
多おほく狂くるひひああららず願ねがふふああららず怒いかりりと鎮あめめめめひひりり稟まうせせりりと聞き召よべべるる那な縁えん連れんの團だんを賣うりり身みは  
利りと揣ねるる佞ねい人にんるるれれもも然さららとと知ち召よべべるると壁かの月つきの明ありりもも撰えんるる浮う雲うんを掩おかかして遂つひに光ひかりを

ううままどど漫まんの他たが便べん利り只ただ説せつ成じやうされれぬぬひひりり専せん那な議ぎを任まかせせて今いま番ばん北きた條じやう氏しと和わ議ぎ  
只是ただ千せん慮りよの一いつ失しつ狹せう素そより良りやう善ぜんの死し計けい策さくよよひひるるの故ゆゑをを一いつ言ごんををめめるる忠ちゆう  
臣しんも遠とほざざらられれ又また縁えん連れんの媚めいるるの功こうをを時ときにに解とけけるる解とけけるる前まへもも是こゝにに思おもひひ思おもひひ思おもひひ  
も女に諷ふうの誚しやうと憚おそりりて諫いさ難がたさをを多おほくく況またた數かずをを守まもりり如ごとくく直ちゆうをを死し折をるると  
らちらち歎なげかかつつててののいいひひがが今いまのの折をりり及およぶぶ犯とがしてして諫いさめめままららずず忠ちゆう義ぎの本ほん意いをを差さすすべべきき  
知ち召よべべるる那な縁えん連れんの千せん葉は家けの昔むかし臣しん龍りゆう山さん逸いつ東とう太たいと喚こゑれれ折をりり馬うま加か常じやう武ぶの共とも誘よははれれ千せん  
葉は家けの忠ちゆう臣しん粟も飯はん原げん首しゆをを杉すぎ戸この松まつ原げんをを詐まがりり害がいしてして逐おつつ電でんしてして下した野の世よにに潜ひそみみ那な首しゆの  
妖まじ人にん假かり赤あか岩いわ一いつ角かくがが徒た弟ていととままりりそのその大だい刀とう筋すぢをを受うけけるる假かり一いつ角かくの吹ふ擧あげげるる長なが尾び景けい春しゆん  
主しゆの仕つかへへ亦また復また狂くるむむ罪つみのの亡な命いのちしてして當あた家け未なれれ然しかしし件けんの犬いぬ阪ばん毛もう野の粟も飯はん原げん首しゆが  
送おく腹はらの子こもも同どう盟めい義ぎ士し數かず人にんありり親おやの怨うらみをを雪ゆき入いりりとと悄ささ々ささ地ぢの縁えん連れんをを去さるるははりりそのその顛かぶ  
末すえとと知ちままるるののああららず風かぜ聲こゑ這こりり里さとへへ歩ありりめめるる縁えん連れん當あた家けの仕つかへへりり御ご信しん用よう淺あままららねねば

言路塞りてその昔悪と云々と稟き由ゆら心あるも深き淵に臨むが如く薄氷  
 氷と踏み似て戦々兢々の思ひ已がかりし當家の御武運を不慮に縁連ハ那身の仇る  
 大坂毛野胤智とやらハ敷され又縁連の悪と資けし猛虎既濟一峯們ハ俱小命と殞  
 是より那和議整へて人の下風立あつた當家の幸ひるるも願ふ鼻祖の大神  
 武峯の神助より秋蟹目の前の初なる湯嶋の神の加護ありて那奸佞を鋤れり  
 高禄を留めりて大阪毛野們ハその地方を遠く去るに在るも孝義を奉りて城内より召  
 迎へ高禄を留めりて他の君の寛仁大度と感て忠義を盡すべし然る縁連猛虎  
 士卒幾十名と喪ひふとも損あはれとあつた益ありての議を容れしやかといはせ  
 も果に定正の怒れる敵耳と苛立ちやれ守如推參之縁山縁連ハ那大阪奴が仇も  
 せ復讐言の折あつた我正使とて小原原北條氏遣を折這五十子より程遠か  
 らぬ鈴の茂林埋伏して獨縁連のくるに副使并伴當們ハ大々去るに敷も果せし

阿容々々と七捕捕らるる當家の威風衰へりて是より隣國侮れん憶ふ汝ハ縁連が  
 功と増む小あらん然るも思ひ始より何ぞ一言も諫ざる目今那死之咎及びてその昔  
 悪とのあつたぞ叨他人の武勇と稱へる君と不まる不義失敬其首退せと敦圍ハ暴  
 持る鞭と振抗て西三番壁ハ守如ハ額破れて鮮血面と浸せし令もる鑢と  
 放さぬめび殺せし勵てさ情君の御短慮微臣日屬縁連の奸佞邪智を知  
 るといふもその非とさむ難し御信用深きより遠く他中りて甲斐をりんと思へん  
 今今朝も幸ひ縁連ハ敷きて忠臣これを歎とも君ハ感て醒させあり他  
 與ハ大阪毛野們をみりて捕捕せし遂に千金の死身とされて今危を臨むハ林が  
 まらざるもその那大阪們ハ和漢ハ稀る是世の英雄也異姓の兄弟數人あり影の  
 形ハ従小如く相資ると豫より听するとのゆに然るも其勢カハあつた侮りて強敵あり  
 その美を知り召れね一時の怒り不任ありて連の我を折衷の難義及んば是も亦

知るべきは微臣の職もさるるも君御名代とて士卒を御て。多々那里小赴はて大阪毛野們  
 が猶在るに。詭意を計て俱くして。若又那里と立去ると。往方知れども。速く士卒と分  
 りて隈もく驅涉獵り。多々遇せしむとあるまじき。這義と許さぬか。と涙と流し詞を  
 盡て。肝胆と吐く。孤忠の諫言。定正の之耳。逆ひて堪ぬ。怒り小聲と惜ま。命を死守如要。要  
 諄言の折所。听く暇も。汝とて死小胆見。那大阪們の助劍。あれは定正三軍小將とて。うち  
 向ふも。捷々かかんと。悔り思ふ。独奇怪。然も。不更を。陪る。本。事。と。せん。覚。期。と。せ。よ。  
 と罵り。多々。忽地。小。鎧。と。杭。と。蹴。る。憐。む。守。如。の。曾。と。蹴。ら。れ。て。何。と。多。り。死。活。の  
 知。る。兵。兵。で。殿。居。小。控。と。俯。ら。け。定。正。を。も。く。く。兵。毎。續。け。と。駛。馬。小。鞭。を。鳴  
 ら。く。突。然。と。西。の。城。門。より。走。り。來。れ。從。士。卒。三。百。名。皆。後。れ。と。身。を。起。し。粵。小。脱  
 と。勢。の。張。春。の。朝。易。の。高。瞭。ら。ち。出。て。了。ん。寄。る。清。海。在。不。傷。の。友。多。く。竹。の。雀。の。家。の  
 花。號。軍。旗。號。幟。色。を。え。て。競。入。馬。の。塵。埃。烟。空。を。霞。段。め。て。いと。危。け。り。

第九十二回 轎小坐守如主と救ふ  
 川を隔々孝嗣志と演ぶ

再説扇谷定正。河鯉守如の諫を用ひ。怒り。鎧を揚て。守如と蹴小を。西の城門より走  
 らる馬の前。後相従ふ。その隊の士卒。百餘名。旗と。杖。と。器械。と。見。め。り。て。操。小。操。を。い。は。る。素  
 上の。勢。の。癖。を。い。は。る。敵。の。勇。士。多。く。あ。れ。も。練。小。三。個。過。ぎ。と。思。へ。聊。小。小。先。を。争。ひ。隊。伊。を。乱  
 る。と。高。聲。ふ。ら。ち。浦。曲。迴。小。幾。町。欽。地。方。易。れ。品。草。も。後。の。驛。路。も。多。く。鈴。の。茂。林。邊。近  
 つ。程。前。軍。の。敏。速。に。樹。立。の。内。伏。一。隊。の。敵。を。忽。地。揚。る。因。の。聲。研。小。喚。て。野。頭。れ。お。る  
 と。隊。の。軍。勢。但。見。る。士卒。三。四。十。名。去。回。の。路。横。断。る。小。敵。多。く。も。噪。を。い。は。る。深。山。に。半。隼。鶻  
 燕。雀。と。搏。つ。勢。あり。そ。が。中。の。頭。領。黑。草。威。の。身。甲。小。細。鋒。の。掩。膊。士。頭。の。脛。衣。多。く。長。は。向  
 乃。跨。へ。る。對。の。武。具。勇。は。多。く。九。尺。柄。に。雙。枝。槍。と。兩。の。合。ひ。を。回。魂。凜。々。と。四。下。に。拂。ふ。風。も  
 對。の。兩。聲。高。く。來。れる。を。隊。の。大。將。の。扇。谷。の。管。領。定。正。往。る。丁。酉。の。夏。四月。十三。日。池。袋。合。戦

不汝があふ滅亡せしめ煉馬平左衛門尉倍盛主の舊臣多。大山道即忠與がけの復讐の第一  
 陣。這個異姓の義兄弟大飼現八信道大村大角礼儀が。這里不候し。知るは。找し。勝負と決  
 せし。指招に冷笑ひて大路も陝しと立す。定正れをうめて。原來這地狼籍見の御縁連に  
 敷。果し。那大阪毛野も。その三名の。豊嶋煉馬の殘黨も。亦那隊も存る。遮莫看る  
 ぐ。長の知る鳥合の小敵。躬方の。勢。比。看算。足。推捕。稠。敷。連。不  
 采。帶。揮。躬方。將。大。將。下。知。從。先。鋒。頭。人。地。上。織。平。末。廣。仁。本。太。一。百。餘。個。の。雜。兵。を。魚  
 鱗。小。備。吐。嚙。で。三。王。不。敵。ん。時。現。大。角。躬。方。信。さ。る。女。每。中。割。れ。を。聲。と。け。共  
 受。て。一。人。も。西。入。當。ら。る。の。入。乱。れ。戰。ひ。小。程。不。現。八。地。上。織。平。と。鎧。と。交。え。又。大。角。末。廣  
 仁。本。太。と。雌。雄。争。ふ。戰。ひ。も。定。正。後。陣。の。不。敵。の。伏。勢。猛。起。り。先。手。一。個。の。大。將。是  
 甚。る。打。扮。を。紺。の。糸。の。甲。火。秋。打。る。曹。の。緒。と。締。四。尺。三。寸。の。大。刀。踏。八。四。抽。る。中。黒。の。征。前。將。

白井之平  
 井作  
 古記の載  
 是所異  
 同あり

馳。做。一。本。繁。藤。の。中。中。揮。持。て。挑。花。馬。の。太。逞。に。雲。珠。鞍。措。て。乘。る。天。地。响。聲。も。大。く。響。け。管  
 領。上。杉。定。正。先。亡。煉。馬。の。一。老。臣。大。山。道。策。々。嬌。勇。る。大。山。道。即。忠。與。の。あ。り。曩。白。井。の。狙。撃。の。巨。田  
 助。友。東。と。書。り。て。我。計。畧。終。れ。三。年。の。憤。懷。け。不。至。れ。刃。と。受。と。罵。り。隊。勢。を。找。せ。攻。立。れ。定。正。酷  
 く。驚。び。て。原。來。敵。の。伏。勢。も。快。一。方。と。敷。破。り。退。き。去。り。喚。聲。も。先。手。扇。合。の。士。卒。一。驚  
 慌。て。退。く。欲。去。れ。後。道。節。の。勁。敵。あ。り。又。進。ん。と。欲。去。れ。前。大。飼。大。村。の。兩。雄。あ。り。且。左。は。是。勝。り。な。る  
 大。洋。中。右。の。樹。木。限。も。な。れ。路。陝。く。進。退。便。多。前。後。の。敵。の。探。立。り。敷。る。の。め。ま。る。け。是  
 透。向。も。折。ら。敵。の。伏。兵。の。後。方。小。起。り。後。陣。も。共。乱。れ。織。平。の。胆。落。て。引。外。し  
 と。せ。程。不。現。八。咽。喉。刺。れ。仰。天。死。せ。り。又。大。角。と。鎧。と。交。え。未。廣。仁。本。太。躬。方。猛。可。敗。走。り。地。上  
 織。平。も。敷。れ。敷。驚。怕。れ。逃。ん。と。せ。大。角。透。き。鎧。伏。せ。首。雜。兵。捕。せ。り。小。程。不。定。正。後。敵。不  
 攻。敗。れ。既。危。お。け。有。係。主。の。命。代。之。死。き。兵。多。あ。り。僅。一。方。と。殺。披。て。相。從。近。習。八。九



現八大角雙で大敵と破る  
 品草の原小  
 道節定正と  
 赶ふ

第八回  
定正の  
討伐

名馬の左右成り。品草の走り程。道節は只一騎衆先。馬を馳し。其地を趕。鬼を迫。聲あり立て。管領定正。逢くも敵の背ををさる。けしを復せ。忠與。然の征前。受て。その辰。よの喉。拭て。公前。路近。る。隨。ころ。満月の似く。響固めて。矢聲。矢く。標と射る。修煉。差を。定正。度。の。不。子。射。摧。たる。管。前。响。共。侶。未。偷。緒。之。弗。断。離。れて。塵。地。上。不。遂。る。け。定。正。吐。唾。と。胸。を。渡。し。く。鞍。肩。小。俯。し。其。首。も。う。逃。走。る。道。節。は。不。遣。り。馬。小。拍。れ。埋。る。勢。以。免。る。べ。も。わ。さ。ま。定。正。近。臣。西。名。目。足。非。多。路。踏。留。り。て。齊。一。防。戦。ひ。道。節。は。物。も。甚。左。き。右。き。力。を。抜。内。り。て。近。く。敵。を。伏。し。遠。近。の。馬。の。蹄。踏。て。或。蹴。返。蹀。躑。り。縦。横。音。勇。士。の。突。戦。柳。子。奮。震。の。勢。は。虎。彪。も。用。る。如。く。然。も。四。個。の。近。習。の。母。悍。く。所。の。わ。ね。も。思。不。似。度。之。失。ひ。て。或。は。頭。懸。敷。も。落。され。或。は。深。瘡。の。堪。せ。し。七。仆。も。あ。り。所。も。あ。り。鮮。果。馬。蹄。漫。たる。多。程。不。定。正。の。辛。く。虎。口。を。渡。り。て。稍。品。草。の。原。を。走。る。休。題。更。説。落。結。與。之。有。種。の。御。宗。道。節。論。され。那。隊。加。加。る。と。論。戦。飯。と。炊。與。茶。と。留。置。れ。四。五。名。の。雜。兵。們。共。侶。高。嶺。の。浦。の。松。木。在。り。既。し。く。定。正。兵。多。う。隊。兵。許。多。

品草の原を走り。軍装を看ると分明。けし。那里の戦ひ。あ。も。敗。れ。敵。乱。走。を。と。か。く。と。雜。兵。の。逃。る。あ。り。慌。く。五。十。五。名。走。る。あ。り。有。種。迫。れ。を。之。肚。裏。の。思。を。料。多。優。者。け。の。戦。ひ。定。正。多。う。城。より。出。て。躬。方。の。勝。利。を。大。山。王。の。誠。あ。り。と。我。安。然。と。這。船。成。り。と。這。奴。們。を。數。多。の。あ。り。武。士。の。甲。斐。も。あ。り。似。たり。あ。り。處。死。敵。一。人。も。も。擇。討。敵。を。捕。て。我。も。亦。亡。君。の。志。致。も。な。れ。と。尋。思。と。あ。り。悠。々。と。雜。兵。并。不。戦。ひ。好。む。船。主。們。の。意。衷。示。し。武。具。着。せ。て。悄。々。地。陸。を。登。る。そ。の。隊。の。兵。卒。七。八。名。程。を。樹。蔭。立。願。れ。て。落。多。敵。は。在。り。悠。々。と。知。り。も。扇。合。定。正。僅。小。残。る。近。習。と。俱。し。品。草。の。原。を。走。る。程。亦。亦。復。安。く。も。頭。れ。る。一。隊。の。敵。の。先。我。一。個。の。頭。人。を。鎗。節。間。と。合。組。し。て。耳。を。串。聲。高。安。く。來。れ。る。是。定。正。欣。着。る。鎧。の。威。毛。も。兼。た。馬。也。我。も。知。ぬ。先。君。豐。嶋。勘。解。田。左。衛。門。尉。信。盛。朝。臣。の。奉。為。不。死。心。雪。入。覚。期。せ。と。喚。く。ら。逼。近。つ。て。面。も。ゆ。を。空。て。蒐。れ。定。正。主。徒。驚。慌。て。敢。亦。勝。負。の。好。ま。且。戦。且。走。り。有。種。の。隊。兵。を。烈。く。我。も。息。も。養。れ。痛。瘡。を。肩。て。走。難。敵。面。を。名。撃。捕。り。信。り。れ。も。定。正。僅。小。残。り。免。れ。て。

たるまで あり 初めつら 後方迫るる 相従ふ 近習門の 大なる 路を 敵を 殺せり  
 高嶽を 落て 来る 初め 息を 後方 迫るる 相従ふ 近習門の 大なる 路を 敵を 殺せり  
 二階堂 高四郎 三浦 三吉郎 と 喚ばる 只 這 兩個 の 近臣 の 死 する なる 他 們 の 數 人 所 痛 傷  
 肩 へ 全身 鮮 血 淋漓 定正 憶 び 嗟 嘆 御 家 我 一 身 恨 みの 堪 じ 支 好 河 鯉 權 佐  
 守 如 諫 聴 け 期 既 今 百 遍 悔 甲 斐 快 五 十 子 の 城 中 還 寄 事 敵 防 心 ぞ  
 又 九 町 走 五 十 子 の 城 中 黒 烟 空 焦 兵 火 既 焼 主 從 是 又 驚 び 那 竹 鹿 子  
 呆 呆 馬 駐 留 浩 然 現 大 角 敵 大 將 敵 捕 猛 卒 十 餘 人 相 俱 捷 徑 經 て  
 此 處 目 今 定 正 從 二 名 停 立 推 捕 網 敵 定 正 必 死 の 窮 厄 免 れ ぬ 也  
 二 階 堂 高 四 郎 三 浦 三 吉 郎 共 保 定 正 馬 前 立 塞 敵 柱 現 大 角 敵 殺 小 程 定 正  
 近 着 敵 雜 兵 殺 拂 路 傍 的 阜 馳 涉 腹 斫 覺 期 折 忽 然 二 隊 兵 軍 兵  
 阜 後 走 出 勢 千 餘 人 新 隊 似 珠 亦 討 一 挺 轎 子 雜 兵  
 名 阜 先 小 幡 持 七 河 鯉 權 佐 守 如 大 守 寫 定 正 原 來 敵 軍 兵

り 仍 我 生 不 勝 然 阜 馬 乘 下 定 正 一 騎 守 如 救 喚 勢 中 馳  
 登 時 現 大 角 三 浦 二 階 堂 敵 捕 又 定 正 趕 敵 援 兵 來 主 君 守  
 護 中 小 四 五 人 定 正 從 柴 浦 走 餘 件 轎 子 小 川 前 面 卸  
 整 正 和 然 現 大 角 門 敵 援 兵 來 怖 新 隊 頭 人 豫  
 守 如 且 轎 子 乘 是 詭 計 守 思 躬 方 林 示 敵 數 萬 萬  
 且 射 落 定 正 死 雜 兵 持 不 漏 直 趕 原 折 落 點 与 七 有  
 種 敵 敗 北 精 船 定 正 去 向 渡 攻 戰 後 類 敵 捕 不 定 正 趕  
 人 料 遺 遺 又 大 阪 野 智 德 社 介 小 文 吾 們 共 侶 西 林 樹 原 根 料  
 助 劍 綠 由 初 昨 湯 嶋 社 頭 守 如 密 談 道 節 偷 聞 不 思 議  
 助 及 道 節 竹 君 父 仇 定 正 敵 欲 隊 配 又 大 村 大 角 禮 度

同因果の天士なるを都て送る知るとして感嘆の外多し。鈴の茂林の東方に當りて迫る國の聲。
 原原本原大山の計りて。辛子の城内より加勢の士卒とて。躬方と雖も。争ふ多し。卒然と共
 侶も。かく見せんと。三人連立て。程の躬方の戦ひ勝利を以て。道節現八八角門の北を。
 其首を存し。且五十子の城を討つ。大将の管領の家臣あり。定正か。多勢を以て。出陣は為
 其戦の光景。地方の浦人なる。少知り。俱に。逃る。敵と。遂に。躬方の。逆。意。未。折
 躬方の雜兵も。多し。咸。地方の。取。合。け。介。程。道。節。有。種。們。定。正。援。の。兵。と。て。走。り。て。
 去。り。那。里。不。留。敵。あり。と。現。八。大。角。が。報。を。以。て。送。恨。小。堪。を。中。道。節。怒。れ。る。聲。高。き。
 奴。們。何。なる。の。あ。ん。快。散。散。ら。し。定。正。捕。を。逃。し。七。趕。菟。と。罵。り。泥。障。を。蹴。立。て。馬。を。找。へ。し。
 現。八。大。角。俱。不。林。め。て。喘。り。あ。ま。大。山。王。數。も。漏。れ。天。之。命。を。那。果。和。を。敵。の。頭。人。を。豫。る。名。を
 傳。へ。る。河。鯉。守。如。る。よ。う。小。幡。の。文。字。を。分。明。に。且。戰。の。場。小。臨。を。轆。子。小。ち。兼。る。其。計。策
 知。る。と。是。れ。も。時。宜。し。と。言。世。亦。と。く。諫。を。道。節。聽。か。頭。を。掉。て。を。以。て。去。る。非。除

守如きれば。そ。不。怕。る。と。あ。ん。ん。那。轆。子。と。早。サ。昔。蜀。漢。の。趙。雲。が。躬。方。の。小。勢。不。慌。を。
 廣。く。城。門。を。推。用。て。魏。の。大。軍。を。退。け。る。計。策。不。似。て。し。の。時。必。失。ふ。其。首。放。き。を。敢。圍。け。
 現。八。大。角。の。也。と。莊。介。と。小。文。吾。も。俱。不。道。節。と。推。林。め。て。内。云。と。諫。る。程。小。毛。野。も。亦。道。節。が。馬。の
 邊。を。找。し。て。喃。大。山。主。小。弟。は。大。阪。毛。野。胤。智。之。昨。日。湯。嶋。の。社。頭。也。料。是。對。面。を。れ。も。送。
 認。る。折。り。と。傍。の。人。の。あ。り。を。和。殿。と。猜。し。る。名。も。遂。に。別。れ。お。る。に。那。折。河。鯉。氏。と。我。
 密。談。を。偷。聞。せ。し。て。和。殿。の。事。の。餘。も。諸。大。士。の。帮。助。も。と。父。の。仇。を。報。復。し。る。身。の。故。也。萬。謝。も。又。何。を。足。
 我。の。事。を。和。殿。の。亦。君。父。の。仇。定。正。主。を。殺。せ。し。れ。軍。界。精。妙。思。ひ。の。隨。小。敵。を。屠。り。て。勢。ひ。の。及
 び。る。支。皆。皆。意。表。不。出。さ。る。と。感。を。あ。ま。り。あ。り。あ。れ。も。つ。ら。く。支。情。を。思。ひ。我。復。鮮。血。の
 便。宜。の。也。和。殿。の。折。を。あ。り。も。河。鯉。氏。が。主。の。側。多。奸。佞。龍。山。縁。連。們。を。除。ん。と。相。計。ひ。た。は。
 その。孤。忠。を。お。し。れ。我。們。の。德。を。と。せ。小。弟。の。始。も。和。殿。の。軍。議。を。知。ら。し。も。尚。和。殿。と。共。侶。
 定。正。主。を。殺。し。走。ら。し。河。鯉。氏。を。給。て。不。忠。の。人。と。る。事。不。似。し。然。と。小。弟。重。し。和。殿。の。戰。ひ。の。期。

後れて方僅面會するをゆるし任官和殿（ここの）とされかき小弟のけの戦ひ不定正主と趕ふ  
か毛然るを況河鯉氏を是義の赴く所とて和殿と疎畧の思ふまゝに尚思意よりて揣  
ら定正主の既走の理も今中及ぶに然りとて今ある河鯉氏を殺さず三舎を避て  
那孤忠を空しうせざるも武士の情を他も較そ甚くは是非及ぶ所を折雌雄を決するも  
怯しと誰うは死に這議をうて進退を定めぬ後悔ありと怖る要るを言と詞を盡す  
諫れ口官勇道即も言の道理通らね又いふもさるる然るを感す其小文吾就中  
現大角の毛野が議論をうて俱不感嘆の聲を聞え憶るも名告げ大坂主我々の  
大飼現八信道大村大角礼儀をゆて御の大尖塚の密議中と和殿の與敵助劍を  
御んを隊兵三千許名を従へ程は樹蔭に伏願て姑且勝負を現ひ小大田大川一勇を  
那助劍を殺散らして後をさるるが我々の下ま及ぶ折る管領定正主がみづろ  
城よりうち出て鈴の茂林邊に来りければ更亦大山の與敵と戦ふ北の趕を捷徑

よの剛才這里に来るもの毛野の恭く現大角のら對して大飼主大村主とせせ  
我復讐の本意と遂に皆足諸彦の賜のりも稍安知之感謝も勝も宿因の致を所  
狭九慮の三則知妻のあふ誠なる幸いなる其終を演るを有種も亦我毛野對して  
名告も料も諸大夫の愛顧も身の致も詞短く告げり同近敵と措かす肩をも  
せりけ這六大夫の回答を側聞せ雜兵們且感下且現英雄の胆魂は格別多し語  
此の馮思ひの然る折敵射方の相距るを遠くもあは同一條の溝川あり繞板橋と  
架ら敵の殊さ小勢を他も橋を引かせ眼あを在程六大夫同合議論の那果もやえけ忍  
地敵の隊伍中より年尚青に一個の武者小樓威の鎧を着て眉刀を狭小川の上を杖を  
や不喚るも其方の陣あり大坂毛野流智のまを大山氏もいほるも必く不しはをわれ  
俱に這方へ杖を以て推し不月るも河鯉權佐守如獨守を河鯉佐太郎孝嗣と喚るも願  
ふのとくかのと両番叫びる登時毛野道節敵敵年より何れ此も猶豫さ道節



尚又その期は遇ふ便捷を旋り胤智と刺錯て其首を死ねまうが親の過を聊補ふたかと思ふこの  
 餘の首首様々々と教訓丁寧なれば小子の意をなれぬ然も親を棄置して燔死せん公まが中よ  
 る轎子も扶衆せ思義の士卒千餘名と謀し令ら轎子と昇て這里小走の多て思ふがて我君の必死を  
 救ひまわさる然我親子二名の此の難兵を従て敵を防ぎて我君を後安く落しまわさると思ひ決り  
 今まも只死を極め存けし和殿們も亦左右き鬼兵後れて來り大阪の大山氏の軍議を知り初  
 對面言の顔未洩して這里も守るる聊恨を釋ふ必死を不討にゆるまう大山氏のいふて我親と  
 大阪氏の密談を知りて多隊配をもあらん知る統の隊兵をり七敵と掃るる間て益々多  
 ら親の疑惑と承弁せん與先との一義及ぶのとれ感する毛野も道公即胤智の答を寺を  
 らし領て如右思ふる定以る我の憶も湯嶋の社頭徘徊して那密談を偷听する折に  
 て大阪の面を認められも是宿因の係り所異姓の弟兄多しと思ひ合せ證もわれその復讐は趣を  
 義兄弟們も告智豫毛野と相識する大田大川二人をり情多地小縁連小助劍の奴們を防

せらよの便軍より我がより大阪の五子子の城内へ入るる加勢の士卒もあまらるるその虚を現ひ短  
 兵急な城を抜た仇を屠りて亡君亡父の向を胸の軍議と定め大塚大飼大村們俱に舊  
 好の兵を従て便軍の地方小隊配ら城の虚実を現ひ小思ふは倍て造化精妙定正みう大阪  
 們を追捕へんそ士卒も漫城よりあられり因て猛京部も易て天塚信乃小城を攻め酒家も  
 大飼大村と東西立られ不意起り管領を挾きて攻撃かり思ひの依る勝軍を我定正射  
 たれもその前を兇と権兵の裏缺ぎり盛と棄て仇の命を免れし任れ大阪のうら我軍  
 累を知はりあらんや他他が難言と敷きて河鯉氏と約束違へる我死を雪め忠  
 と孝とを盡すの欲まは所各異は只恨り我馬疲れて定正漏るるれも透さる起て敷も東  
 をもあはる敵加勢の頭人肩谷の大忠臣河鯉權佐守如く寫す小幡小衆兄弟大阪們が云云と  
 議論小時の程りいけそと思ひ仇の命運も盡さるあらんぞ定正走らるる和郎們親  
 子と敷るん要すともまの迹を甚かてその故をなれぬと考嗣らるる言送も身義の明辨那疑ひ

釋とくれども然しかまて不よ義理ぎりと違ちがひて。是こゝれ豊とよ嶋しまと煉ね馬まの火ひを野の心こゝろより討うち果はつた。獨ひとり我われ君きみとて。山やま内のうち管くだ領りやう家け顯けん定ていも同どう意いのよとて合あ戦せんあり。和わ殿てんの只ただ管くだ我われ君きみとて。仇あつとて執しやく念ねん深ふかく恨うらみは甚し甚し麼やと。詰つれ道みち即すなはち冷ひや笑わらひて。そのつとを。豊とよ嶋しま煉ね馬まの滅め亡つ。當あ時とき定てい正せいの軍ぐん界がいを。巨こゝろ田た持ぢ資し大だい將しやうも山やま内うち顯けん定ていも十じゆ葉はつ津つ宮みやと將しやうとて。加か勢せの軍ぐん兵へいあり。主しゆ客かくの勢せも同どうく。是こゝれ扇あふ谷やの正せい敵てき也なり。山やま内のうち傍たがひ仇あつ昔むかし唐たう山さん晋しんの趙てう孟めい恤しゆの魏ゑい氏し韓かん氏しと謀まうし合あを。較かくして智ち伯はくと滅めし。あつた豫よ讓じやうの知ち伯はくの獨ひとり獨ひとり趙てう氏しを仇あつと。冤うん之し韓かん魏ゑいの怨うらみと。是こゝれ趙てう氏しの正せい敵てき也なり。韓かん魏ゑいを傍たがひ仇あつれ。我われ定てい正せいと仇あつとて。山やま内うちを怨うらみと。支し情じやうの相あひ似に。和わ郎らう們らが知しる。と。毛け野のの推おし許もと。考かう嗣しの對たいして不よ倭よ素すより。大だい山さん内うち座ざせ。趣しゆを既すでに會あ得とくせ。れ。上うへの餘あま談だん蓋がい不ふ似に。守しゆ如じゆ主しゆの馮ほう我われを。我われの面おもてと認める。及および雖すなはち輒しかち。鼓こあり。あつた。今いまも。大だい山さんの方かた人ひとと。和わ殿てんの火ひの對たい面めんと。是こゝれ是こゝれ。再また會あひ。病びやう臥ふの對たい面めん不ふ便べん也なり。と。許もとの。他ほか事ことも。孝かう嗣しの異い議ぎ及および。急いそ後ご方かた。

と。その轎こ子しを這こ方かたと招まく。雜ざ兵へいを。川か畔はた近ぢかく。登のぼ時とき仇あつ大だい郎らう孝かう嗣しの。大だい阪はん毛け野のの對たいして。請こゝろを。推おし辭じを。親おやと這こ方かたと招まく。實じつに病びやう臥ふの爲ために。許もとの。軀かたを。轎こ子しの引ひを。推おし開ひらく。毛け野の道みち節せつの共とも侶りも。斬き守しゆ如じゆの腹はら極ごく。破やぶる。衣い裳じやうの鮮あざ血ちを。思おもひ。登のぼ時とき河か鯉り孝かう嗣しの。涙なみだを。大だい阪はん主しゆ親おやの。自みづか殺ころの計けいを。山やま内うちの。恨うらみ。又また我われの。鮮あざ目め前まへも。救すくふ。奸かん佞ねい人ひとを。誅つとむ。守しゆ如じゆの。出で處ところ不ふ定ていの坐ま敷しき師しと。討うち。還かへて敵てきの便べん宜いと。君きみの危あや窮きゆうも。刺さ城じやうを。破やぶる。孰たゞの路みちも。我われ君きみの。切きる。君きみの。死して。我われ言ことを。後ごも。知しる。刀やいばを。果はつ。夫おとこの終しゆう焉なり。我われ身みを。俱く死しす。親おやの遺い言ことを。鮮あざ目め前まへの。先まへ轎こ子しを。兼かす。志こゝろを。諫かんふ。煙けむりも。紛まれ。後ごも。辛くるしみも。却かへて。其その後ごも。親おやの亡な骸がいも。火か中ちゆうに。惜おぼし。

のつめらう。轎子こしの程ほど一乗ひとと昇のぼして這里こゝ果たまるまけり。亡な骸がらも我君わがきみの死し馬前うまのまへで父子ちちこ共とも侶りの屍しかばねを曝さらす。是これは切きてのりのりの事こと。と思おもひひるるは違ちがふ。約束やくそく達たつ大阪おおさかまで。貳に百ひゃく心こゝろと知して初はつの恨うらみ悔くはくも。飲のくも我君わがきみの危あやししむむ救すくひまささるる。是これは孝うやまつ嗣つぐが功こうを死しののち後のち敵あいつの英い氣きを折おくくるる親おやの忠ちゅう那な死し甘あま孔明こうめいが生なるる仲なつ連れんを走はりませせ。と以もつて傳つたへ唐山たんの諺ことわざの及およぶぶも。子ことて尉ゑいののち上かみののち中なかつののちああるる成なりののちけり。又また死しののち既すでに書かけり。果たまるる敵あいつも理り義ぎを賢あやししむむ諸あれれ諸あれれ大おほききののち交まをのち素もとより願ねがふふ所ところ。思おもひひるる隨したがふふ戰いくさ殺ころすす親おやの遺い訓くんを稱たたふふ君きみ辱はらられれ時ときの臣おん死しままととののち聖せい賢けんの教おしを恥はずずるるもああららん卒つひ這方こゝより渡わたりり。其その方かたより鬼おにららむむ。とて雌メ雄オスを凍こゆゆ詞ことば雄ゆうをのち死しののち急いそぎぎ忠ちゅうと孝うやまつと歎なげめめののち日本にっぽん魂たま深ふかに那親なののち子こののち宜よろしし可か惜あはれれ後のち生なるる今いま敵あいつも果たまるる何なにののち健けん氣きをのち愛あいむむ毛け野の道みち節ふしに倒たふれれ怖おそれれるる望のぞみみかかるる戰いくさに推おし辞して去いるる人ひとはのち死しののち感かん嘆たんの外ほかにのち段たんののち事ことをのち楮かみ數かずをのち定さだめめるる卷まきと更さらに這これれ解と分わかるると聽きぬぬかか。

南總里見八犬傳第九輯卷之一終

九編六卷一角

一

松野

勝春院

